
Crimson Curse -クリムゾンカーズ-

姫月 銀牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Crimson Curse - クリムゾンカース -

【Nコード】

N4422I

【作者名】

姫月 銀牙

【あらすじ】

普通の高校一年生、白城海徒はくしろかいとはいつものようにクラスメイトでモデルの神宮瑠偉しんくつるい奈と、同じくクラスメイトで幼馴染みの鈴瀬樹里すずせじゅり亜と共に帰宅中神社に寄って、暇を潰していた。そこで海徒は一人崖から落ちてしまう。そして海徒が崖の下で見たのは大量の死体と禍々しい鳥居。導かれるように鳥居に吸い込まれ、気付けば赤黒い空に極寒の大地が広がる異様な世界。その世界で海徒が出会ったのは前世の恋人だった。海徒は彼女からはこの世界が地獄の一つである大紅蓮地獄であることと、彼女が今現在この大紅蓮地獄の主である

紅蓮姫だということを教えられる。そしてそこから二人は共に大紅蓮地獄を抜け出すことを決心する。

冥界の鳥居

貴方は覚えてる？

貴方が私の恋人であったこと

貴方が私の兄であったこと

貴方が私にとって一番大切な人であったこと

そして二人で死んだあの日の約束

私は全て覚えてる

あの日から数百年の年月が経った今でも貴方に対する気持ちは変わらない

誰よりも貴方を思い、誰よりも貴方を愛し、誰よりも貴方を大切に
する

・・・でも私は貴方に会うことすら許されない

永遠に解けない紅蓮の呪縛から解放されない限り・・・

・・・

頬を誰かにつつかれる。

「・・・ねえ、海徒お」

身体を起こしつつ、白城海徒は目を薄く開けてみた。どうやら学

校の教室の自分の席で眠っていたらしい。

「大丈夫？」

顔を上げて見ると、クラスメイトの神宮瑠偉奈が心配そうにこちら
を見ている。先端をくるくる巻いたブロンドのストレートヘアに、
翡翠のような緑色の瞳。人形のように整った容姿。美しさと可愛さ

を兼ね備えた、誰もが認める美少女だ。

日本と英国のハーフで、高校生でありながらモデルという職についている。

「なんだ、瑠偉奈かよ」

「む、瑠偉奈だったらいけないの？」

「別に・・・」

「むー、最近海徒冷たいよー。瑠偉奈は心配してるのに」

「特に冷たく接してるつもりはないが？」

「そんなのうそ！前は海徒もつと優しくかった！」

「左様でございますか。以後気をつけます。では今一度仮眠をとりたいので邪魔しないでくださいませ」

海徒はそう言って机に顔を伏せた。

「もー！そんなのじゃないー！それにもう起きてよー。放課後なんだよ？」

「ん、ほうかご？・・・放課後！？」

「そうだよ」

顔を再度上げて、辺りを見回してみる。瑠偉奈に机に机に机・・・教室には二人以外誰もいなかった。

「いつの間に終わってたんだ。ていうか授業終わって一時間も経ってるし」

黒板の横の掛け時計の針はちょうど4時30分を示している。

「どうせ起こすなら早く起こしてくれればいいに」

「だって海徒が気持ちよさそうに眠ってるから起こしづらかったんだもん」

「でも結局起こしてるし」

「そ、それは海徒が急に苦しそうに見えたから・・・、悪い夢でも見てたの？」

「まあな」

海徒は席を立って自身の荷物をまとめ始めた。

「どんな夢なの？」

「姿の见えない女の人が一方向的に語りかけてくるっていう夢。昔から見続けている夢なんだけど全然馴れないんだな、これが」

「へー、そうなんだ。へんな夢だね。その女の人とはどんなこと言ってるの？」

「毎回言ってることは違うんだけど、さっきは愛してるとかなんとか言ってたな」

「え！？ ええと、それはただ海徒の妄想が夢になっただけじゃないのかな？」

さらりと結構傷つく発言。

「失礼な。そんな中途半端な妄想しねーよ。じゃあな」

荷物をまとめ終わった海徒は帰宅するため、教室の出入口に向かって歩きだした。

「ちよつと待つてよう」

「どうした？ 俺に何か用でもあるのか？」

「むー、瑠偉奈と一緒に帰ろうと思って海徒が起きるの待つてたんだよ」

瑠偉奈が走って追い付く。

「そうならそう言えよ。今から仕事あるかと思つたし」

「今日は休みなの。仕事あつたら学校来ないよー」

「だから瑠偉奈は欠席の日が多かつたんだな。てつきりさぼりだと」

「もー、今まで知らなかつたの？」

「俺には関係ないからな」

なぜか隣で瑠偉奈は不満そうに頬を膨らます。

「そついえば瑠偉奈、俺と二人で帰つて大丈夫なのか？」

教室を出て、二人は廊下を歩き始めた。

「何が？」

「彼氏のこと」

「へ？ カレシ？」

「この前聞いたぞ。サッカー部の北崎に告られたこと」

「え！ ああ、北崎君のことね。お断りしたよ」

また勇者が一人散ったか・・・

「まったく、また断ったのか。これで何人目なんだ？北崎結構いいヤツだと思っただけだな」

「北崎君とは相性が悪いの」

「なんで？」

「理由はないけど、んー？なんでだろ？」「俺に聞くなよ。それよりそろそろ誰かと付き合ったらどうだ？モテるんだし」

「なんで？海徒は瑠偉奈が他の男子とお付き合いしても何とも思わないの？」

少しの間、海徒は考えるように黙り込む。

「・・・多分その男がうらやましいと思うだろうな、こんな可愛い彼女がいるんだから」

「そういうふうに思うんだ・・・、なんかありがとう」

瑠偉奈は少し頬を染めた。

「何に感謝してんだ？」

「可愛いって言ってくれたから」

廊下の端まで歩いた二人は階段を降りる。

「可愛いから可愛いって言って悪いかよ。話を戻すが、とにかく、瑠偉奈は誰かと付き合った方がいい。俺みたいにつまらない青春になるからな」

「その話なんだけど・・・」

瑠偉奈は急に階段の途中で立ち止まる。

「海徒は瑠偉奈に彼女・・・で欲し・・・の？」

海徒も立ち止まって、瑠偉奈に振り返る。

「何？今器楽部のせいで聞こえなかった、もう一回たのむ」

「もー、なんでもないよー。海徒の馬鹿あ」

顔を真っ赤にしながら、瑠偉奈は再度階段を降り始めた。

「何キレてんだ？変なやつだな」

「むー、馬鹿にしてー」

「すまない俺が悪かった。」

よく分からないまま、とりあえずあやまっておいた。こんなところ見られたら男子全般に殺されかける気がする。

「なんで謝るの？」

「なんとなく」

「海徒のいじわる」

と言われましても対応に困る。

「二人とも待つてよー！」

突然、上から女の声が聞こえた。声が出た上の階に視線を移すと、
鈴瀬樹里亜すずせ じゅりあがいる。

「部活行かなかったのか？」

「今日はミーティングだけだったの」

彼女も瑠偉奈と同じくクラスメイトで、軽音部に所属している。小学生からの幼馴染みであり、しかもなかなかの美人で性格も明るいため、男子はもちろん女子からの人気も高い。

「私も一緒に帰ってもいい？それとも邪魔しちゃったかな？」

「別に邪魔になんか・・・」

「うわーんじゅりあー、かいとがいじめてくるよー」

抱きつく瑠偉奈の頭を樹里亜は優しく撫でる。

「怖かったね。いい子いい子、瑠偉奈をいじめるやつはお姉ちゃんが地獄に送るから」

にっこりしてた樹里亜の表情がこちらに向いた瞬間変わった。

「お、俺は何もしてないって。マジで！ぐほあ！」

「く・・・俺は何もしてないのに・・・っーか普通女子が男子の急所を手荷物で殴るか？」

痛みに耐えながら通学路の坂道を必死で登る。

「海徒が悪いんだからね」

「だから俺は何も・・・、ごめんなさい。多分、いや絶対100%完全に俺が悪かったです」

樹里亜に睨まれてすぐさま言葉を変更する。

「反省してるならよし。以後気をつけること」
なんて女尊男卑な社会なんだ。

「ごめんね海徒。瑠偉奈のせいで・・・その、海徒の大切なところが・・・」

恥ずかしそうに瑠偉奈が小声で謝ってきた。まあ、可愛いから許す。
「ねえ、今から神社行かない？」

唐突に樹里亜が提案する。

「めんどくさい」

「行く行くー」

海徒と瑠偉奈が同時に答えた。

「というわけで行こ、二人とも」

「うん」

「あのー、俺の意見は・・・」

また無視か。ホントこれだから幼馴染みというやつは、他人には優しいのに。

「あーあ、帰って勉強したいのに」

「はいそこー平気で嘘つかない！どうせ帰ってもろくなことしないんだから」

なぜか今回は樹里亜が過剰に反応した。

「何を根拠に？俺がいつも家で何してるのか知ってるのか？」

「えー、それは・・・口では言いにくいあんなことやそんなこと・・・他には本、ビデオ、DVD観賞、そしてたまにネットで動画。ちなみに全て18禁」

「お前こそ平気で嘘ばかり言ってるじゃないか。てか俺のこと過小評価し過ぎだ。そこまで飢えてないぞ」

「でもこの前ベッドの下で本みつけたよ？」

「樹里亜、てめえいつの間にか家に入ったんだ？いくら近所で幼馴染

みでなおかつ可愛いくても許されないことはあるんだぞ。そこらへん分かってるか？」

「一人暮らしの海徒の面倒を見ている私は保護者なの。保護者が部屋を探つて悪いかしら？」

「保護者はお前じゃなくてお前の両親な」

「二人とも喧嘩はやめようよ」

ここで瑠偉奈が仲介する。

「久々に三人で集まったんだから、たまには神社に行つてもいいでしょ？海徒？」

「瑠偉奈がそう言うなら」

「差別差別ー！瑠偉奈の話は聞いて、私はどうでもいいんだ」
ためえに言われたきゃねえよ。

「あの神社に行くのも久々だな。三ヶ月ぶりといったところか」

なぜか初めて三人で帰宅した時のことを思い出す。もともと幼馴染みの樹里亜とは知り合いだが、有名女子高生モデルの瑠偉奈と仲良くなれるとは思ってもしなかった。瑠偉奈と仲良くなれたのは樹里亜の紹介によつてだ。

明るい性格で入学式の日からいきなり瑠偉奈と仲良くなった樹里亜はその日の下校中に紹介してきた。当時は瑠偉奈がモデルだと知らなかったが、こんな普通な男がこんな可愛い女の子と仲良くなることに罪を感じた。特に他の男子生徒の石化+麻痺+呪い+即死効果のある視線に耐えるのにかんりの精神力を必要とした。さらに樹里亜も美少女であるため、敵は増える一方である。これまで何度世樹の葉とフェニツ スの尾を使つてきたことやら、そういえばラストエリ サーも数個使つた気が……。それはいいとして（改造してアイテム増やすから心配するな）、現在まで数々の試練に耐えたため今でも三人は親友でいられる気がする。おそらくこれからも。

「相変わらず何の変化ない神社だな」

いろいろ考えてるうちに目的地に着いた。

どこにでもある普通の神社で冥王神社という名前だ。樹里亜がまだ軽音部に入部していなかった五月上旬までは、瑠偉奈と三人で毎日放課後、この神社で暇を潰していたものだ。それ以降もテスト週間など三人そろって帰れる日はよくここへ来た。

「階段多いよー。海徒背負ってー」

「ずるいよ瑠偉奈、私も乗せて」

「お前ら俺を殺す気が、自分で登れ。太るぞ」

「はいはい」

樹里亜は渋々社殿へ通じる階段を登り始めた。

「ふ、太る・・・」

「おい、恐れ過ぎだ」

隣で瑠偉奈は『太る』という単語に恐怖を感じ、硬直していた。

「ふう、やっと着いたー」

「もう瑠偉奈疲れちゃったよ」

「同感だ」

三人は最上段にぺたんこ座り、登って来た階段の向こうに広がる町を眺める。ここからは地元・紅葉上もみじがみの町が一望できる。

「いつ見てもきれいだね」

「だって瑠偉奈たちの町だもの」

「多分俺たち卒業したらこの町出て行くんだよな。瑠偉奈は本格的にモデルの仕事始めるし、樹里亜は進学希望だろ。俺は海外の両親のところへ行かねーといけねーし」

「なんか瑠偉奈寂しいな」

「何いつてるの、二人とも。まだあと二年は一緒にいられるんだよ。」

それまで一緒に学生生活を満喫しなきゃ。」

「確かに、樹里亜の言う通りだ。それに俺たち卒業しても連絡取り合おうと思うし、またこうやって集まるだろ」
そう言いながら、海徒は立ち上がった。

「あれ？海徒どこ行くの？」
首をかしげて瑠偉奈が尋ねた。

「境内一周してくる」

「瑠偉奈もついて行くこうか？」

「いや、一人で回る」

「気をつけてね」

「ああ」

海徒はそう言い残し、社殿の方へ歩いて行った。

「なんか気になるんだよな」

なぜかいつもは気にならない崖の近くにあるの神木が異常に気になる。そこへ引き込まれるように、足が勝手に動き出した。

「やっぱりでかいな」

樹齢400年を越す老木だ。表皮を触りながら、崖の下を見下ろす。

・・・助ケテ、

ふと、崖の下から声が聞こえた気がした。気味が悪かったが、崖に身を乗り出して見てみる。

・・・やはり空耳だったのか崖の下には人はいない。海徒はその場から立ち去ろうと神木に背を向けたが、

・・・助ケテ

今度は確実に聞こえた。

「ったく、なんだよ。こういつの関わったら引き返せない性格なん

だよ。亡霊か？俺でよければ成仏させるぜ？」

今一度崖を覗いてみる。もちろん誰もいなかったが、今まで見たことのない崖の下へ通じる小さな階段を見つけた。

「ここから降りろってことだろ？」

何もない空気に向かって語りかけてみる。

返事はない。

「無視すんなよ。俺帰るからな」

・・・ダメ・・・

声が聞こえた瞬間ものすごい力で身体が引つ張られた。そしてそのまま崖に落ちて行った。

「痛てててて」

かろうじて助かったが、体の至るところを擦りむいた。

「おい！せつかく相手してやってるのにこのもてなし方はなんだ！」
空気に向かって叫ぶが、やはり返事はない。

辺りを見回してみると沢山の木々が生い茂る雑木林だった。崖を見ていると、先程までいた神木は遙か上にある。登るための階段はないし、崖を素手で登るには相当な時間がかかりそうだ。

そこで崖の反対から山を下ろうと身体の向きを変えた。

「なっ！！！！」

目の前の光景を見て、思わず声を詰まらせる。

そこには腐敗が進んだ人間の死体があった。

突然吐き気が襲い、その場にかがむ。

「はあはあ」

極端に乱れた呼吸を正常に戻そうと深呼吸した。

落ち着いたところで立ち上がり、もう一度辺りを見回す。

「何だ、ここは！」

改めて見てみると、死体は一体だけではなかった。足元にはいくつもの白骨死体が転がっている。

ここでようやく気付いた。声はここにある死体の前の持ち主たちのもので、仲間を増やそうと崖の上にいる人に声をかけてはここへ落として殺している。多分これが正解だ。俺はたまたま運良く生き残ってしまったが、普通はあの高さから落下すれば重体もしくは死亡するだろう。

いろいろ考えてみたが、今はそれどころではないことを思い出す。まずはここから立ち去るべきだろう。

山を下る方角を確認して、海徒は歩き始めようとしたが、前方で新たに腐敗した死体より不気味ものを目撃してしまった。

死体を避けながら、それに近寄ってみる。とても古く、朽ちて崩れそうな赤黒い鳥居。なぜか雑木林の中にぽつんと立っている。山に死体がある理由はだいたい分かるが、理由もなく立っているいる禍々しい鳥居はその何倍も恐怖を感じさせる。

ゆっくり雑草を掻き分けながら鳥居に近寄り、手前で足を止める。

・・・ココマデキタノ、貴方ダケ・・・

声が出た方向を向いた瞬間身体が宙に浮き、そのまま鳥居に吸い込まれた・・・

血の霧と空っぽの街

寒さで勝手に目が覚める。

うつ伏せになっていた海徒はすぐに立ち上がった。

・・・どこだここ？

頭に浮かんだのは、単純にそれだけだった。赤黒い空に青い大地、植物はまったく生えていなかった。

振り返ると、あの禍々しき鳥居が立っている。

ということはあの鳥居をもう一度くぐれば元の世界へ戻れるのだろうか？

10メートルほど離れたところにある鳥居を目指して歩きだした。

ギシッ

いきなり背後で土を踏み締める音がした。恐る恐る海徒は足音のした方を見る。

長く伸びた爪、強靱な肉体、剥き出しの鋭い牙。身体は茶色く、鼻より上の肉はえぐれて無くなっている。それは明らかに地球上の生物ではなかった。

それは四足歩行でゆっくりとこちらに近づいてきた。海徒は本能的に鳥居に向かっ走りだす。振り返るとそれはものすごいスピードで追い付いて来た。

鳥居までは約1メートル、背後の生物は5メートル近く離れたところにいた。このまま走り続ければ振り切って元の世界に帰れるはず。

しかし、予想に裏切られることになった。

鳥居をくぐっても、そこはまだ異世界。

生物はすぐ後ろに迫り、今にも飛びかかろうとしている。

既に恐怖は絶望へと変貌を遂げていた。

こんなところでくたばってしまうのか・・・

得体の知れない生物が大きく跳躍し、襲いかかろうとした瞬間死を覚悟する。

グウォン

不思議な音と共に、目の前が青く光る。生物はその光に触れた瞬間跳ね返された。

その光は鳥居から発せられたもので、よく見ると光は模様となって浮かんでいる。跳ね返された生物はもがき苦しみ、息絶えた。数秒後、その光の模様は薄れてなくなった。それを見て勝手に力が抜けてくる。

「助かったのか・・・」

海徒はゆっくりと息絶えた生物に近づいてみる。

鳥居の光に触れた部分の肉は焦げて崩れかけていた。

海徒は赤黒い空を見上げ、途方に暮れる。

鳥居を潜つても元の世界に帰れないのは分かった、だが他の出口がないと言い難い。このままこの場所で待っていても何も始まらない。

海徒は青い大地を見ながらゆっくりと歩き始めた。

山を何個越えただろうか、足が痙攣し始めている。いくら歩いても青い大地以外は見えてこない。

「くっ・・・」

痛みを感じる足を見ると、血が靴に染み出している。

腕時計はこの世界に来た時から止まっているし、携帯はもちろん圏外だった。この世界に太陽が無いため時間はわかりにくいがおそらく一日以上歩いているだろう。

体力に限界を感じた海徒はその場に倒れた。

大地は冷たく、急激に海徒の体温を奪う。

そのうち痛みも感じなくなり、体がだんだん熱くなった。

更に瀕死の海徒は酷い眠気と空腹に襲われ、そのまま意識が薄れていった…

…きろ、諦めるな海徒

目の前には心配そうな表情をした男性がいた。見た感じでは20代前半で、体が眩しいくらい輝いている。そしてどこか懐かしい感じにさせてくれる、そんな人だった。

こんなところで止まっていたのは駄目だ。歩き続ければ必ず元の世界に戻ることができる

倒れていた海徒は立ち上がった。それを見て男は微笑む。

「貴方はいつたい？」

男は黙ったまま答えなかった。海徒は昔この人にあつたことがある気がした。誰かは思い出せないが雰囲気はどこか交通事故で亡くなった祖父に似ている。

男は振り返りその場を立ち去ろうと歩きだした。

「つつつ！」

振り返った男の首に見覚えのある傷が見えた。

それは海徒が幼い時、祖父に戦争中に敵の弾丸を首に受けた傷痕だと教えてもらった傷痕だった。

まさか…

「夢だったのか…」

目を覚ました海徒はすぐに立ち上がる。そして歩き始めた。

いろいろなことを考えているうちにまた何個か山を越えた。そしていつの間にか大地が空と同じ赤黒い色に変わっていることに気づく。海徒が赤黒い大地に触ってみると湿っていた。触れた手を見ると赤い液が付いている。土を少し掘り返すと青い土が姿を表す。つまりこの赤は青い土に降り懸かったものだ。手に付いた赤い液を鼻に近づけて衰えた嗅覚を使うと、金属の鉄の臭いがする。

海徒の直感が告げる。

間違いなく血液だ。

よく見てみると、この赤黒い大地には血のような鮮やかな植物が生えている。多分この植物は血液を栄養にして成長しているのだろう。

それにしてもこの大地をも染め上げるほどの量の血液は何を意味しているのだろうか。あれだけ広大な土地でまだ一体しか生物に出会っていないのに、ここには大量の血液がある。つまり本当はこの世界にはもっと多くの生物がいるのではないかと仮説を立てることが出来る。

鳥居があるってことは知的生命体もいると考えられる。もしその知的生命体に出会うことができたならば元の世界に帰れるかもしれない。

ない。

そう考えると自然と足が前へ進もうとする。

赤黒い大地に変わって半日ほど経った頃だろうか、海徒は名も無き山の頂上に達しようとしていた。

その土にかかった血液は先程の血液より鮮やかで生暖かく、新鮮なものだった。暖かい血液は気化し血の霧となり、むせ返るような鉄の臭いと赤い霞で海徒の行く手を阻む。

だがある程度の標高に達すると霧は消えていった。そしてついに頂上に達する。

「これは…」

眼前に広がっていたのは街だった。血の霧がかかっていたが建物や明かりが見える。

海徒は街に向かって山を駆け降りた。

これで助かるかもしれない

街の建物は木造の和風なものから石造りの洋風なものまで多くの種類があり、ひしめき合うように密集して建っていた。

しかし、肝心の住民は一人もいない。道はもちろん、建物の中を探しても誰もいない。

それから一日ほど探したが、住民は見つからなかった、空腹を満たそうと食料も探したがそれもなかった。その街は完全に空だった。喉の渇きだけは地面の血液を吸って補った。

「誰かいないのかー！」

肉体だけでなく精神的にも限界を感じ始めた海徒は街の中心部で思い切り叫んだ。

しかし、叫んだところで状況がかわる訳ではない。

海徒膝を地に付け、地面を殴った。

なんで俺がこんな目に、…なんで、……なんでなんで……、祖父ちゃん、俺はもうここが限界だ…

海徒が絶望から解放されようと自分の死に方を考え始めたその時、遠くから鐘を鳴らすのが聞こえてきた。

海徒は咄嗟に立ち上がり最後の希望を抱えて鐘の音が聞こえる方向に走り出した。

しばらくすると至る所から鐘が鳴り始めた。それと同時に街が騒がしくなる。血の霧は濃くなり、人のうめき声のような音が聞こえるようになった。

走っていた海徒は血の霧に人の形をした陰を見たため、そこへ方向を変えて人陰に近づいた。

「すいません、そのあなた！ 教えて頂きたいことが山ほどあるんですが」

人陰はゆっくりとふらつきながら歩いて来たが、何も応えない。

「ちよつとあなたのことですよ、無視し…！」

海徒は人陰の真の姿を見て言葉を失う、それは人間の形はしているものの人間とは程遠いものだった。手足は確認できるが、全身の皮膚が裂け血だらけで、顔は歯以外が何なのか判断できない。

海徒はそれとは逆方向へ駆け出した。しかし、逆方向にも数体の陰が、振り返るとそこにもいつの間にか数体の陰がこちらに近づいていた。

それは時間か経てば経つほど増殖し、海徒は壁に追い詰められる。近くに落ちていた石を思い切りそれに投げた。石はそれに当たるとその体を簡単に貫通した。それは苦しそうな声をあげながら血液を辺りに撒き散らしたが、それでも倒れることなくこちらに近づいて来る。

不死身となれば俺に勝ち目は無い、だがここまで来てこんな奴らにやられる訳には

海徒はそれに向かって走り出し、次々と薙ぎ倒して行った。

しかし、もう体力が残ってはいない。10体ほど気合いで薙ぎ倒したところで足が動かなくなった。

これで本当に終わるのか…

薙ぎ倒したそれらは立ち上がり再度歩き始める。

諦めるた海徒は目を閉じて死を待った。

…なぜまだ殺されない？

恐る恐る瞳を開けてみる。

もう辺りにはそれは1体もいなかった。

どうなってるんだ

いつの間にか鐘の音は消え、そのかわりに小さな鈴の音が聞こえてきた、

「珍しいお客様ね」

優しい女性の声だった。

「大丈夫。私は貴方を害したりしない」

血の霧から現れた声の主は少女だった。和服を着ており、血のよう

な赤い瞳と髪をしている。肌は病的なまで白く死人のようだった。

しかし顔立ちは可愛いらしく、体つきも綺麗で静かな美少女だった。

「あの…」

海徒は何を話せばいいのか分からなくなる。

少女は海徒の顔をじっと見つめて口を開いた。

「貴方はもしかして…」

紅蓮の姫と黒い満月の下にそびえる巨城（前書き）

ようやくの話です

感想頂ければ幸いです

あとがきも書いてます。（宣伝）

紅蓮の姫と黒い満月の下にそびえる巨城

海徒の顔を見た少女は感情のなさそうな綺麗な白い顔で彼女なりに小さく驚いた表情をした。

「どうかしましたか？」

「なんでもない……」

少女は即座にそう答え、背を向けた。

「あの……、いろいろと聞きたいことが……」

「ついて来て」

少女は海徒の言葉を無視して歩きだした。それに続いて海徒は彼女を追う。

「君はその……、なんていうか」

「姫。私のことはそう呼んで」

突然少女が立ち止まって振り返る。

「ひ、ひめ？ ひめってあのお姫様のひめか？」

姫と名乗った少女は紅蓮の瞳で海徒を再度見る。

「それ以外に何かあるかしら。不思議なことをいう人ね」

「それはそうだけど、姫って……、本名はなんて名前なんだ？」

「そんなものは持ってない、他の者は私を姫と呼ぶ。ただそれだけ」

姫は再び背を向けて歩き始めた。

何なんだこの女。見た目は良いが中身は女王様かよ。でもついて行くしかないよな

すっかり静かになった街に彼女の小さな鈴の音が響く。

海徒が空を見上げると、いつの間にか赤黒い空に黒い満月が浮かんでいた。

「貴方はどこからここへ来たの」

しばらく歩かされた海徒は街の外れの小さな道で姫に案内されるままに不思議な乗り物に乗った。大きさは乗用車程度で運転する者はいない。ボディは金属で出来ていて、周りに燃え盛る紅蓮の炎をまとい、宙に浮いていた。

今海徒と姫はその乗り物に向かい合う形で座って乗っている。

どこからって言われても困るよな。こことは違う世界といったところだろうか？

「そんなことは知ってる、私が聞きたいのはどこからここへ入って来たのか」

海徒が話す前に姫が先に口を開いた。まるで心で思っていることを読みとったかのように。

「へ？　なんで俺が言おうとしていることが分かるんですか？」

「愚かな質問には答ええない。私が聞いているのはどこから入ったか」

面倒な奴だな、やばっ、今のも読まれてるかも……。ええと、俺は確かこの街から見て遙か遠くにある赤黒い鳥居から入って来たんだっとな。

「それは東にある愚者の門のこと」

やはり読んでやがる。心を無にしなければ……

「いやあ、先程は助けに来てくれてありがとうございます。俺の名は白城海徒、よろしく」

「貴方の名前は昔から知ってる」

姫が右手を上げると開いていた乗り物の扉が重々しく閉まり、動

き始める。窓がなく内部から外が見えないため、どこへ向かっているのか全く検討がつかない。

「あるかしら、何か聞きたいこと。愚かな質問は答えない」

「山ほどあるわ！ まずここはどこだ？」

先程から落ち着かない様子の海徒にに対し姫は紅蓮の瞳で海徒を見つめたまま、両手を足に乗せて動かない。それは本当に死んでいるようだった。

「……ここは地獄。最も罪深い魂が罪滅ぼしをする八寒地獄の中でも最深部にある大紅蓮地獄。罪人達はここで罪を償うまで罰を受け続け、許された者はあちらの世界へ転生する」

「地獄……だと、てことは俺は死んだのか？」

「いや、貴方は死んでない。だから貴方はここにはいけない。「死んでないのになんで俺は地獄にいるんだ!？」」

「落ち着いて。貴方が通った愚者の門はあちらの世界と地獄を結ぶ唯一の門。あの門は生者、死者関係なく通れる。だからいつも鬼に見張らせている」

「あの生物は鬼だったのか……、人間が想像している鬼と全く違っ
じゃねーか」

「世界は人間中心にできている訳ではない」

「そりゃそーだが……」

「なぜ貴方が引き返さなかったのか聞きたい、それに本来なら鬼が貴方を追い返すはずよ」

「あの鳥居はもう使いものにならねーよ。鬼は鳥居が出した青い光に当たって死んでしまったしな」

「愚者の門が閉じたのね」

「そのぐしゃのもんつてのが閉じたら俺は帰れないんじゃないのか？」

「大丈夫、私がなんとかする」

「それなら問題ないが……」

だんだん状況が把握できてきた。つまり地獄に生きてままだま迷い込

んで、帰る手段を探し中だという訳だ。

「他に聞きたいことはあるかしら」

「さっき俺を襲った化け物はなんだ？」

「あれはここで罰を受けている罪人達」

「元人間なのに人間離れし過ぎだな。それになぜ俺に襲いかかる必要がある？」

「彼らがここに来たときは普通の人の姿をしていた。だけどここ大紅蓮地獄は極寒の地。寒さ故に罪人達の皮膚は裂け、血が吹き出して紅蓮の花の様になる。彼らが貴方を襲ったのは、生者の魂を喰らうと一瞬痛みを消すことができるから」

「なんて恐ろしいところなんだ」

血だらけの罪人たちが脳内でフラッシュバックし、背中が一瞬寒さを感じる。

「それともう一つ聞きたい。今俺と姫さんは二人でどこへ向かってるんだ？」

「もうすぐで到着するわ」

姫がもう一度右手を上げると乗り物の金属の壁が透明になった。

「あそこが私の家。貴方を持って成してあげる」

海徒は姫が示す方向を見て、この少女が姫と名乗ることに納得した。

姫が示した先にあつたのは天空をも貫く巨大な建築物。横幅も広く山よりも大きな黒い城だった。

なんて大きさだ……

姫は相変わらずの無表情でこちらをじっと見ている。

紅蓮の姫と黒い満月の下にそびえる巨城（後書き）

この度小説家になろう関連サイトの小説家になろう〜秘密基地〜で新イラストコーナーにてイラストを投稿致しました。興味ある方はどうぞ。何か質問あればメッセージで。返信は遅れる可能性があります
りますm (((m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4422i/>

Crimson Curse -クリムゾンカース-

2010年10月10日03時08分発行